

『枕草子』の「ゆかし」とその位置

土屋 博 映

一 はじめに

「日本国語大辞典」(以下、「大辞典」とよぶ)によると、「ゆかし」の持つ意味は次のとおりである。

- ① それに心がひかれ、実際に自分で接してみたいという気持ちを表す。
- イ どんな様子が見たい。行って、それを見たい。また心ひかれて
いる人に、会いたい。
- ロ 何であるか知りたい。誰であるか知りたい。どんな様子や状態
か知りたい。
- ハ 演奏、声などを聞きたい。
- ② なつかしい。恋しい、慕わしい。
- ③ 情趣や気品、優美さなどがあって何となく心がひかれる。上品で
深みがある。

①が原義であろう。自分の気持ちが、対象に、言ってみれば、具体的に、ひかれるのである。そこから、イの「見たい」ロの「知りたい」、ハの「聞きたい」など、また文脈によっては「読みたい」などの意味となるのである。これは、

ある対象を——知りたい(見たい・聞きたい・読みたい)という構造であるから、非常に具体的、かつ行動的、かつ動作的である。これでは、「快」の方向にあるものの、美的評価を示すものとは言えない。

②は①から発展したものである。具体的にどうのこうのしたわけではない。感情的に、「なつかしい」「恋しい」「慕わしい」のである。美的評価を完全に行っているわけではないが、①よりは、より心情的である。つまり、語源の「行く」が薄らいで、形容詞的に発展してきたものと考えられる。言うならば、「快」を示す言葉である。

③は②から発展したものである。「上品で深みがある」というのは、まさに美的評価であると言えよう。ここで、「ゆかし」が、美的評価を表す形容詞として完成したということができらるだろう。

ところで、現代語ではその「ゆかし」がそのまま残っていない。「ゆかし」という言葉は、存在しないわけではないが、一般的ではない。「山路来て何やらゆかしすみれ草」などの例があるが、一般的にはならなかった。

それによって、存在するのが「おくゆかしい」という言葉である。これは当然のことながら、「ゆかし」を語源として成立した言葉と考えられる。そこで、「おくゆかしい」についても、見てみたい。

「大辞典」によると、「おくゆかしい」の持つ意味は次のとおりである。

①その奥にあるものに心がひかれる。その先が見たい。その先を聞きたい。その先を知りたい。
②深い心づかいが見えて、なんとなく慕わしい。深い思慮があるように見える。上品で深みがあり、心がひきつけられる。

①がもとで、まさに「奥」プラス「ゆかし」が語源で、その「奥」が、「知りたい」という意味から、②の「上品で深みがあり、心がひ

きつけられる」に発展し、美的評価を表すようになったと考えられる。

「大辞典」によれば、「ゆかし」の本来の意味は「心ひかれる」ことで、そこから結果的に文脈により、「上品」という意味が生まれてくるのだろうと考えられた。そこから判断すると、「ゆかし」そのものも「おくゆかしい」も同様な変化をたどって「上品」という意味を持つように至ったのだろうと推定される。

こうして見ると、「ゆかし」は本来、美を表現するものではなく、単に興味をひかれる、具体的、動作的な言葉だったということがわかる。

では、はたして、「枕草子」では「ゆかし」はどのように用いられているのか、関連することばにはどのようなものがあり、どのように用いられ、どのような均衡状態を保っているのかを、見て行こうと思う。

その関連する語の一つは「なつかし」である。「ゆかし」の語源は「行く」という動詞が形容詞化したものと言われているが、それと同様の成立をしたものが、「なつかし」なのである。

「なつかし」は「なつく」という動詞が形容詞化したものであり、この点、「ゆかし」に非常に近いものがある。では、「なつかし」の「大辞典」による記述を見ておこう。

①心がひかれ、離れたくないさま。愛着を覚えるさま。魅力的だ。慕わしい。

イ人、人の心や姿をはじめ、音・香などを含め、広い対象についていう

ロ衣服が、着馴れて程よくのり気がとれて、からだになじんでいくさま。

②(中世以降に生じた意味)過去の思い出に心がひかれて慕わしいさま。

①の意味が現代語のものである。①が「ゆかし」の②に近いが、その記述には「ゆかし」とは微妙な相違が見られる。

次に、関連するものとして、「つきづきし」の大辞典の記述を見てみよう。

いかにも似つかわしい。ふさわしい。好ましい。調和がとれている。

「つきづきし」は語源が「付き付きし」だという。「付く」という動詞からの成立である点、「ゆかし」「なつかし」と類似している。

成立が似ているからなのか、「ゆかし」「なつかし」「つきづきし」は、いずれも「感じがよい」といった意味を持つことで、共通して

いる。つまり、これら三語は、非常に親しい間柄なのである。その用法がどのように異なるか、相違する点に注目し、これらの位置関係を考えるのが本稿の眼目である。では、それぞれの用例を見て行こう。

用例はすべて「枕草子総索引」による。ただし、各段数は、便宜を考えて、「日本古典文学大系・枕草子」によるものとする。

二 「ゆかし」の用例

1、若きは物もゆかしからむ。女などのある所をも、などか忌みたるやうにさしのぞかずもあらむ。(六段、「思はむ子を法師に」)

「法師」が、禁欲的な生活を強いられることについて述べた部分。若い時は、法師といっても人間だから、いろいろなものに興味をひかれるだろう、女などものぞいて見たいだろう、と言うのである。「ゆかし」の前に「物も」とあること、また後に、「女などのある所をも」さしのぞかずもあらむ。」とあること、つまり「なか」さしのぞかずもあらむ」とあることから、ここでの「ゆかし」は、具体的に「知りたい」の意味と考えられるわけである。「大辞典」で言えば、①の意味となる。

2、六位など、立ちさまよへば。「ゆかしからぬことぞ。早く過ぎよ」と言ひて、いきもていく。(九九段「五月の御精進のほど」)

これは、「六位など」が、「立ちさまよへ」(「大系」注・あちこちしているの)とある。つまり人をさがしているのである)なの

で、そのようなものはどうでもいい、「見たくない」から、早く通り過ぎよ、といった場面である。やや、「興味がひかれる」意味として「ゆかし」は用いられているとも見られるが、「見たい」という具体的な意味の気持ちが強いと、考えられる。①と見ておくのが妥当だろう。

3、「ただこの心どものゆかしかりつるぞ。」と仰せらるるついでに(二三段「清涼殿の丑寅の隅の」)

これは、中宮定子の言葉で、「ゆかし」の前に「この心どもの」とある。「この心ども」とは、清少納言の機知について言っているのである。中宮定子の質問に対し、期待どおりの回答を、清少納言はしたということになる。無論、「知りたい」の意味である。これは①の意味となる。

4、異人も、「げにゆかしかりつるものを」など言ふを、御前にも仰せらるるに、同じくは言ひあてて(八七段「職の御曹司に」)

これは、有名な雪の山の話である。雪の山がいつまで持つか、争っていた作者は、その結果を知りたかった。「異人」も同様だったのである。これも当然「知りたい」意味となる。問題なく①である。

5、おまへの池、またなにの心にてつけけるならんとゆかし。(三八段「池は」)

これは、「池」を列挙した類集段の項目である。「おまへ」つまり「御前」という名に、興味をひかれたのである。「なにの心にてつけけるならんと」あるから、その名前のついた由来を「知りたい」

という意味だと認定できる。無論①である。

6、顔知らぬは、誰ならむとゆかし。(二二一段「正月に寺に籠りたるは」)

これは、「正月に寺に籠りたる」ときに、「顔知らぬ」人を見かけたので、「誰ならむ」と「知りたく」なったのである。「誰ならむ」を受けるのだから、当然「知りたい」ということになる。①で問題はない。

7、人の子産みたるに、男女、とく聞かまほし。よき人さらなり、えせ者、下衆の際だになほゆかし。(一五九段「とくゆかしきもの」)

これは、「とくゆかしきもの」という段の中の項目にあたる。ここで、「とくゆかしきもの」の全文を記しておこう。

とくゆかしきもの 巻染、村濃、くくり物などを染めたる。人の子産みたるに、男女、とく聞かまほし。よき人さらなり、えせ者、下衆の際だになほゆかし。

除目のつとめて、かならず知る人のさるべきなき折りも、なほ聞かまほし。

「人の子産みたるに」について、「とく聞かまほし」とあり、さらにそれを受けて、「下衆の際だになほゆかし」と記され、また後の「除目のつとめて」についても、「なほ聞かまほし」とあるので、この「ゆかし」は、「知りたい」の系列の「聞きたい」に相当することがわかる。つまり①である。

8、うれしきもの、まだ見ぬ物語の一つを見て、いみじうゆかし

とのみ思ふが、残り見出でたる。さて、心劣りするやうもありかし。
(二七六段「うれしきもの」)

これは「うれしきもの」の一つ。「ゆかし」の前に「まだ見ぬ物語の一を見て」とあり、後に「残り見出でたる」とあるので、「知りたい」の系列の「見たい」に相当することがわかる。問題なく①である。

9、人の国よりおこせたる文の物なき。京のをもさこそ思ふらめ。されどそれはゆかしき事どもを書き集め、世にある事なども聞けば、いとよし。(二五段「すさまじきもの」)

これは、「すさまじきもの」という類集段の一部。「人の国よりおこせたる文の物なき」は、「すさまじきもの」とは言っても、「ゆかしき事どもを書き集め」でいて、「世にある事なども聞けば」、「いとよし」だと言うのである。これも「知りたい」系列の「聞きたい」の意味が相当すると考えられよう。①である。

10、奉る御衣の色ごとに、やがて御かたちのにほひあはせ給ふず、なほことよき人も、かうやおはしますらむとゆかしき。(一〇四段「淑景舎、東宮に」)

これは、中宮定子の美しさを見た作者が、淑景舎もやはりこれほど美しいのかと、心がひかれる様子。一見、美を表しているようだが、実は、中宮が、作者に淑景舎をこっそり見せてあげよう、とこの前の部分で述べたのを受けているので、「知りたい」と考えるのがよい。①としておくのがよいだろう。

11、とくゆかしきもの 巻染、村濃、くくり物など染めたる。
(一五九段「とくゆかしき物」)

これは、「とくゆかしきもの」の冒頭である。これだけでは、「ゆかし」そのものが、具体的に「知りたい」意なのか、美を表すのかはつきりしないが、7の例から、「知りたい」意の系列と考えられるので、①としておくのがよいと思われる。

12、今少し奥に引入りて、さすがにゆかしきなめり。御几帳のほころびよりはつかに見入れたり。(一八四段「宮にはじめて参りたる頃」)

これは、中宮が、淑景舎を近くで見せてやろうと言って、作者が几帳の透き間から、のぞきこむという場面に「ゆかし」は用いられているのである。10と同じく、「知りたい(見たい)」の系列である。①としておいてよい。

13、「ゆかしき御文かな。許され侍らば、あけて見侍らむ」とはのたまはずれど(二七八段「関白殿、二月二十一日に」)

これは、一条帝から、中宮定子のところに来た手紙に対し、父道隆が「ゆかし」と言っている場面。これは「読みたい(見たい)」意味ととれるが、かろうじて、「心ひかれる」という意味あいが含まれている。注目すべき例である。問題有りとした上で、②としておこう。

14、よき人のおはします有様などのいとゆかしきこそ、けしからぬ心にや。(三〇三段「宮仕する人の」)

これは、「よき人」、つまり、身分教養が高い人、の様子について「ゆかし」を用いている。実は、この前に、「宮のうち、殿ばらのことども、かたみに語りあはせたるを、その家あるじにて聞くこそをかしけれ。」という文があり、「知りたい（聞きたい）」気持ちが強いと思われる。ただし、「心ひかれる」という意味合いが含まれていることは注目すべきである。一応、①と考える。

15、言ふことは聞えず、男も忍びやかにうち笑ひたるこそ、なに事ならむとゆかしけれ。(二〇一段「心にくきもの」)

これは、「心にくきもの」の段。したがってここでの「ゆかし」は、「心にくし」に近い気持ちを持つということができよう。この例文の前はどうなっているかという点、

夜いたくふけて、御前にもおほとのごもり、人々みな寝ぬるのち、外のかたに殿上人などのものなどいふ、奥に碁石の筈に入る音あまたたび聞ゆる、いと心にくし。火箸をしのびやかについ立つるも、まだ起きたりけりと聞くも、いとをかし。なほ寝ぬ人は心にくし。

このように「心にくし」「をかし」「心にくし」を言い切りとしている部分に出てくるので、「心にくし」はもちろんのこと、「をかし」にも近いということが言えそうである。とすれば、この例は、感情を意味する「心ひかれる」「気持ち」「快」の気持ちが非常に強いということになる。ただし、直前に「なに事ならむと」とあるので、

③ではなく②としておくのが妥当であろう。

16、まいて、うちほほゑむ所はいとゆかしけれど、遠う居たるは、黒き文字などばかりぞ、さなめりとおほゆるかし。(二九四段「常に文おこする人の」)

これは、「ゆかしけれど」と逆接の「ど」の後に「遠う居たるは、黒き文字などばかりぞ、さなめりとおほゆるかし。」とあるので、やや問題はあるというものの、「知りたい」の系列、つまり①としておくのがよいであろう。

17、つゆちりのこともゆかしがり、聞かまほしうして、言知らせぬをば怨じ、そしり(二八段「にくきもの」)

これは、「ゆかしがり」とあり、動詞であるが、動詞ではあっても、「がり」を除けば、「ゆかし」と同様に考えてよいと判断し、とりあげた。以下、用例20まで4例が動詞である。さて、この「ゆかしがり」は連用中止法で、「聞かまほしう」につながるの、「聞かまほしう」と同様、「聞きたい」、つまり「知りたい」の系列と考えるとよい。①ということになる。

18、「さは、こは誰がしわざにか。すきずきしき心ある上達部・僧綱などは誰かはある。それにや、かれにや」など、おほめき、ゆかしがり、申し給ふに、(二三八段「円融院の御果ての年、」)

これも、動詞である。前の会話文に「誰がしわざにか」「誰かはある」「それにや」「かれにや」などがあるので、「知りたい」と判断してよいであろう。とすれば、「知りたい」の系列であり、①となる。

19、鼓の音も例には似ぞ聞ゆるを、ゆかしがりて、若き人々、二十人ばかり、そなたにいきて、(一六一)段「故殿の御服の頃」

これも、動詞である。「ゆかしがりて」の後に、「若き人々、二十人ばかり、そなたにいきて、階よりたかき屋にのほりたるを」とあるので、「知りたい」系列の意味と考えてよい。つまり、①である。

20、やむことなからずとも、若き男などのゆかしがるをも、ひき乗せよかし。(一一二)段「いみじう心づきなきもの」

これも、動詞である。用例は「いみじう心づきなきもの」の一文である。この用例の前に「祭・禊など、すべて、男の物見るに、ただ一人乗りて見るこそあれ、いかなる心にかあらん。」とある。つまり、男が一人で牛車に乗って、見物するのが気に入らないというのである。そこで、この「ゆかしがる」は、「知りたい(見たい)」系列の意味と判断する。多少問題は残るが、①としておいてよいであろう。

21、「その柱と屏風とのもとによりて、わがうしろよりみそかに見よ。いとをかしげなる君ぞ」とのたまはするに、うれしくゆかしさまさりて、いつしかと思ふ。(一〇四)段「淑景舎、東宮に」

これは、名詞であるが、「ゆかし」に接尾語の「さ」がついただけであるので、「ゆかし」と同様に取り扱ってよいと考える。この部分は、10、12と同様に、中宮定子が、作者に、淑景舎をすぐ近くで見せてやろうという場面である。後に「いつしかと思ふ」とあるので、「知りたい(見たい)」系列の意味と判断できる。つまり、①

である。

「ゆかし」について、動詞「ゆかしがる」、さらに名詞「ゆかしさ」も含めて用例を検討したが、ほとんどの用例が「知りたい」系列の意味、つまり①であることが、判明した。つまり、「ゆかし」は極めて具体的かつ動作性の強い言葉であり、「魅力的だ」とか「美しい」などという「美」を意味する言葉としては用いられない傾向にあるのである。①の「心ひかれる」がグレードアップして、②の「慕わしい」として用いられる例でさえ、わずかである。まして③の「上品で深みがある」という、「美」を表す言葉、つまり美的評価語としては、まったく使われないことなのである。

ここで考えられることは、「枕草子」での「ゆかし」は美的評価語でも、「快」を示す感情語でもなく、具体的に「知りたい」「見たい」「聞きたい」という願望、希望といった要素が強いものだと言うことができよう。

三 「なつかし」の用例

22、鶯は、いとみめも見苦し。まなこゝなども、うたてよろづになつかしからねど、ゆるぎの森にはひとり寝じと争ふらむ、をかし。(四一段「鳥は」)

これは、「鳥は」の段で、「鶯」について述べた部分である。前に「みめも見苦し」「うたて」とあり、それが「なつかしからねど」と

一致している。ということとは、「なつかし」そのものは、「見苦し」
「うたて」と対極の位置にあると考えることができる。つまり、「心
ひかれる」とか「感じがよい」とかいう意味をもとに、魅力的だと
言った意味で、用いられているのである。美的評価といってよいだ
ろう。「ゆかし」と同様に考えれば、③である。

23、殿ばらなどには、心にくき今参りの、いと御覧する際にはあ
らぬほど、やや更かしてまうのほりたるに、うちそよめく衣のおと
なひなつかしう、ゐざり出でて御前にさぶらへば、ものなどほのか
に仰せられ、子めかしうつましげに、声のありさま、聞ゆべうだ
にあらぬほどに、いと静かなり。(二〇一段「心にくきもの」)

これは、「心にくき今参り」の「まうのほりたる」様子について
「なつかし」を用いている例である。「心にくし」「うちそよめく」
「ほのかに」「子めかしうつましげに」「静かなり」などとともに
使われていることなどから、「心ひかれる」はもちろんのこと、「魅
力的だ」くらいの意味、つまり美的評価で用いられていると考えら
れよう。「ゆかし」で言えば、③である。

24、よろしき男を下衆女などのほめて、「いみじうなつかしうお
はします」など言へば、やがて思ひおとされぬべし。(三一一段
「よろしき男を」)

これは、「下衆女などのほめて」とあるので、「よろしき男」に対
して、「なつかしう」は、「魅力的だ」などという褒め言葉として使
われている用例だと考えられる。美的評価と言ってよいだろう。

「ゆかし」で言えば、③である。

「なつかし」は、わずか3例だが、いずれも「心ひかれる」とい
う気持ちをもとにした上で、「魅力的だ」といった美を表している
ものと考えられる。すべて美的評価である点、「ゆかし」とは、大
なる相違があると考えられる。

四 「つきつきし」の用例

25、すこし老いて、物の例知り、おもなきさまなるも、いとつき
つきしくめやすし。(四七段「主殿司こそ」)

これは、「主殿司」について述べられたものである。用例の前に
書かれてある文を全文掲げてみよう。

「主殿司こそ、なほをかしきものはあれ。下女の際は、さばか
りうらやましきものはなし。よき人にもせさせまほしきわざな
めり。わかかたちよからんが、なりなどよくてあらんは、ま
してよからんかし。」

ここに、「主殿司こそ、なほをかしきものはあれ。」とあることに、
注目したい。この「をかし」の流れ(イメージ)に、「つきつきし
くめやすし」はのっている表現である。さらに言えば、「うらやま
し」「よき人にもせさせまほし」「わかかたちよからんが、なり
などよくてあらん」「よからんかし」なども関連しているのであ
る。つまり、ここでは「つきつきし」は「をかし」の系列であり、

「めやすし」と非常に近い意味で用いられているということになる。ただし、「つきづきしくめやすし」とあるので美の主体は「めやすし」の方にあつたものと思われる。そこで、美的評価とは言えなくても、美的評価に近い、つまり、「快」だと考えてもよいだろう。「ゆかし」なら②である。

26、実方の君に、「消息をつきづきしう言ひつべからむ者ひとり」と召せば、(三五段「小白河といふ所は」)

これは、「大系」の注では、「口上をうまく言えそうな者を」と記されている。いわゆる「魅力的だ」などという美的評価までは行かなくても、それに近い「快」を表現していると言つてよいだろう。つまり、「ゆかし」で言えば、②である。

27、牛飼童、なりいとつきづきしうて、牛のいたうはやりたるを、(二〇三段「心にくきもの」)

これは、「牛飼童」の「なり」について「いとつきづきしうて」とあるので、身なりの美しさを言つていふと考えられる。つまり、美を表現しているのであり、これは美的評価と言つてよいだろう。「ゆかし」で言えば③であるが、「牛飼童」という身分の低い者に用いられている点、注意が必要であろう。

28、大納言二所、三位の中將は陣に仕うまつり給へるまに、調度負ひて、いとつきづきしうをかしうておはす。(二七八段「関白殿、二月二十一日に」)

これは、「大納言二所、三位の中將」の様子について「いとつき

づきしうをかしうておはす」と評価している。ここでは「つきづきし」は「をかし」と同類の言葉として用いられていると考えられる。もちろん、美的評価と判定できる。「ゆかし」で言えば③である。ただし、「つきづきしうをかし」とあるので、美の主体は「をかし」かとおもわれる。

29、また装束し、壺胡録負ひたる隨身の出入りしたる、いとつきづきし。(六〇段「よき家の中門あけて」)

これは、「装束し、壺胡録負ひたる隨身の出入りしたる」様子について「いとつきづきし」と評価している。美を表すものと考えてよい。美的評価と判定できる。「ゆかし」で言えば③である。

30、きよげなるわかき男どもの、主と見ゆる二三人、桜の襖、柳などいとをかしうて、くくりあげたる指貫の裾も、あてやかにぞ見なざる。つきづきしき男に装束をかしうしたる餌袋いだかせて、小舎人童ども、紅梅・萌黄の狩衣、いろいろの衣、おしすりもどろかしたる袴など着せたり。(二二〇段「正月に寺に籠りたるは」)

これは、用例全体を見ると、「きよげなる」「をかしう」「あてやかに」「をかしう」などと一連の関連語として用いられていることがわかる。「つきづきしき男」が「きよげなるわかき男ども」と対等であることを考えると、美を表現する言葉と考えてよいだろう。美的評価と判定する。「ゆかし」なら、③である。

31、つきづきしき隨身など近う呼寄せて(二九一段「好き好きしくてひとり」)

これまた、「隨身」について用いられている。もちろん、美を表現していると考えられる。美的評価と判定する。「ゆかし」なら、③である。

32、人の家につきづきしきもの。(二三五段「人の家につきづきしきもの」)

これは、「つきづきし」が主題となっている段である。他の主題をなしている言葉と同様に美を表現していると思われるが、実際の項目そのままをあげて考えてみよう。

人の家につきづきしきもの 肱折りたる廊。円座。三尺の几帳。
おほきやかなる童女。よきはしたもの。侍の曹司。折敷。懸盤。
中の盤。おはらき。衝立障子。かき板。装飾よくしたる餌袋。
からかさ。棚厨子。堤子。銚子。

この用例全体から考えると、取り上げられた各項目はたいしたものではない。そこで、美を表すのではなく、「ふさわしい」とかいう、美的評価の前の「快」の段階と考えておくのが安全かと思う。「ゆかし」なら、②である。

以上7例のみであったが、「つきづきし」は、美を表現するものとして「めやすし」「をかし」「あて」などと同様に用いられることが多いということが言える。ただし、美的評価の傾向が大いに強いのであるが、時に美的評価の一步前、つまり「快」を意味するにすぎない例も見られたことには注目したい。

五 結論

「ゆかし」は、対象に興味を持つ、という気持ち非常に強いようである。そこから、具体的に「知りたい」「見たい」「聞きたい」「読みたい」などという意味があてられることが多いのである。美を表す方向にはあるのだが、抽象的な、言わば、ハイレベルな美を表す場合は少ない。

もしも美に関わる言葉を3段階に分けるとしたら、

①快の方向↓②快↓③美的評価語

このようになるであろう。これをふまえて、3語を位置づけてみよう。

「ゆかし」については、②がわずかに見られるだけで、③と判定できる例は皆無であった。これは、もしかすると「ゆかし」を成立させた「行く」という動詞の動作性が強いことによるのかもしれない。

結局「ゆかし」が美的評価語となるのは、「ゆかし」そのものよりも、「奥」と「ゆかし」の複合語の「おくゆかし」の方であったと言えるだろう。

「なつかし」は、用例は少ないのだが、すべて「魅力的だ」などと言う、③の美的評価語であった。この点、「ゆかし」よりも、抽象性が高く、形容詞的な状態性が高い。これは、もしかすると「なつかし」を成立させた「なつく」という動詞の状態性が強いことに

よるのかもしれない。

「つきづきし」は、大部分が③の美的評価語であると考えてよいかと思われる。これは、「なつかし」に非常に近い。ただし、「なつかし」のように「魅力的だ」といように、強く美を表現するのではなく、「にっかわしい」とか「感じがよい」とか、どちらかというのと、②の快を示す傾向にあるようにも見える。とくに気になるのは、「つきづきしくめやすし」とか、「つきづきしうをかし」などと、後に「めやすし」や「をかし」を従える例が見られることである。そういう点で、「なつかし」よりも美的評価語としての強さは劣っていると言えるようだ。これは、「なつかし」の語源となった「付く」という動詞の性格によるものかもしれない。

したがって、「枕草子」においては、「ゆかし」「なつかし」「つきづきし」の関係は、美的評価語としては、

なつかし \vee つきづきし \vee ゆかし

という位置関係になりそうだ。

「枕草子」では、「心ひかれる」意味の、「なつかし」「ゆかし」「つきづきし」「三語の関係は、「なつかし」が美的評価語としてもっとも強く、「つきづきし」は、美的評価語としてはそれよりもやや弱く、それら二語に対し、「ゆかし」は、「快」の方向を示す役割をしていたと言ってよいと思われる。

(本学 教授)